

シュタイナーの人間認識と音楽教育の理論

大久保 佐知子*

Sachiko OKUBO
Über die Musikpädagogik vom Gesichtspunkte
anthroposophischer Menschenerkenntnis

1. はじめに

本論稿はルドルフ・シュタイナー（1861～1925）^{注1)}の創設した自由ヴァルドルフ学校（Freie Waldorfschule）^{注2)}の音楽教育の内容と方法に注目し、その根底にあるシュタイナーの人間観、音楽観を明らかにしようとするものである。シュタイナーの世界観は人智学（Anthroposophie）とも呼ばれ、宇宙の生成史、人間の成り立ちを含む壮大なスケールを持つものである。彼は人間の感覚によって把握しうる世界の背後に、感覚と感覚によって限定された思考を超える世界（Übersinnliche Welt……超感覚的世界、あるいはHöhere Welt……高次の世界ともよばれる）が存在することを自明のこととして自らの思想を展開した。精神の領域を探索する彼の「精神科学（Geisteswissenschaft）」^{注3)}は、こうした感覚ではとらえられない領域を対象としながらも厳密な科学の方法を志向している。

シュタイナーに対する様々な批判、非難、また誤解に基づく偏見もなくはない。しかしとらわれない目でみれば、何よりも70年にわたる教育の分野での彼の思想の実践が実に注目すべき成果をあげていること、また建築、オイリュトミーなどの芸術分野においても、農業、医学など自然科学の領域においても、現代の抱える様々な問題の解決の一つの方向が実践的具体的な活動によって示されていることは疑い得ない。このように広範な分野においてその思想が実践に移され、検証されてきた点で、シュタイナーの業績は他に比類のないものとなっている。そして一人の人間の業績としてはまれにみる多岐にわたるシュタイナーの創造—実践活動の各分野は、それぞれの内容と構造を持つと同時に、彼の世界観である人智学に包括され基礎づけられているのである。

さて、本論稿の課題である音楽教育の内容と方法に目を転じてみよう。自由ヴァルドルフ学校の音楽教育の方法は刮目されるべきものがあり、そこに含まれている現代の音楽教育の抱える諸問題についての豊かな示唆は、傾聴に値するものである。そして70年間にわたるその成果は疑いようがないものとして衆目を浴びているところでもある。しかしこの教育実践から真に学ぼうとするならば、それを可能にしたシュタイナーの人智学的界観に向かわざるを得ない。

一見すると、芸術分野での多大な著作の中にあっては、音楽に関するものはとりわけ数少ないようにも見える。それだけにかえて彼の音楽に関する発言は含蓄の深いものとなっている。彼の音楽分野での探究の中心に据えられていたのは、「音楽」ないしは「音楽的なもの」の源泉をとらえることであり、「音楽的なものの本質」を把握することであった。精神世界の探究者であるシュタイナーにとっての音楽とは、興行化された演奏会や、音響機器によって大量に伝達される類いのものではない。世界と人間のうちに音楽的なものとして生き、そして体験されるものなのである。彼はこのような意味で「音楽的なもの」である言語感覚と聴覚、四肢のリズム、呼吸過程と心拍などに関する論及、また和声論や楽器論とそれにかかわる音楽教育の諸問題、更にはピタゴラス派の再解釈ともいうべき「音楽的宇宙論」にも論及している。

シュタイナーの音楽論及び音楽教育論の固有性は、人智学的人間観に即して音楽や教育を検討し、独自の音楽像を描出しているところからくる。彼の論述はまた即当時の文化、学問、芸術の在り方への痛烈な批判ともなっている。本論稿では彼の音楽論、音楽教育論を、構造体としての人間認識とのかかわりにおいて論述し解き明かしていきたい。そのことによって現代の音楽教育を考える上での新たな知見を得たいと考える。

* 島根大学教育学部音楽研究室

2. 人間及び世界の三層性と音楽

シュタイナーの依拠する人智学の特質は、感覚によってとらえ得る世界の背後に、感覚を超えた精神世界が存在し、この世界が宇宙の根源であるとする考え方である。シュタイナーによればこの超感覚的世界、精神世界は決して空想的なものではない。それは確かな実在であって、どのような人の中にもこの世界を認識し体験しうる可能性が秘められているという。しかし現代の物質主義、あらゆるものを数量化しようとする価値観は、多くの人間の認識を物事の表面にしか到達し得ない感覚的、物質的な認識にとどめているのである。にもかかわらず、自由で偏見のない明晰な思考によって、感覚及び感覚にとわれた思考の枠を超えた超感覚的な世界認識に至ることはだれにでも可能なのである。

このような超感覚的な世界の認識に立つとき、人間はまず精神 (Geist) 魂 (Seele) 身体 (Leib) の三つの側面からなるものとしてとらえられる。シュタイナーはこのことを次のような言葉で述べている。「人間は星空を見上げる。魂 (Seele) が受ける感動はその人間のものだ。しかし彼が思想として精神 (Geist) において把握する星々の永遠の諸法則は、彼にではなく、星々自身に属する。かくして人間は三つの世界の市民である。その体を通して彼は身体が知覚するところの世界に属し、その魂を通して、彼自身の世界を構築し、その精神を通して、この両者の及ばぬ世界が彼に啓示される。」^{注4)}

シュタイナーはまた人間を「小宇宙」^{注5)}とみる。前述のように精神、魂、身体三重の構造を人間が持つということは、大宇宙が、同じ三重の構造をもっていることによるものである。シュタイナーによれば人間の肉眼でとらえられる星という物質的存在を誰も否定しないのと同様、精神の世界、すなわち感覚を超えたところに存在する世界は実在の世界なのである。そしてこの世界こそが根源的である。彼は言う。「精神世界では一切が絶え間のない活動状態を保ち、止むことのない創造行為を続けている。物質界に存在するような休息とか、停滞とかいうことはここには存在しない。なぜなら創造する本性が原像なのだからである。原像は物質界と魂界に生じる一切のものの創造者である。」^{注6)}

このように世界を三重の構造をもつものとしてとらえる人智学の立場からは、音楽はどのようなものとして把握されるのであろうか。

シュタイナーは、あらゆる芸術の中で音楽だけが物質界にその“手本”を持たないと考えていた。例えば絵画や彫刻の場合、芸術家はその範例を現実の中に求める。

勿論現実を単に模写するのではなく、多くの印象を重ね合わせ、取捨選択、抽象、捨象をくりかえす中で新しい形姿を創造する。しかし「現実の印象の形象化」という立場を音楽に摘要しようとしてもそれはなんら成果をあげることはできない。そこで次のような問いかけが生じる。「芸術的に形づけられた音とは一体どこからくるのか。それは世界とどのような関連をもっているのか。」^{注7)}これにたいして彼はショーペンハウエルの音楽論を援用しながら次のように述べる。「音楽家が作曲するとき、彼は何も現実界の事物を模倣しようとはしません。彼は自分の魂の中から、音楽創造の動機を取り出します。それでは一体、彼は魂のどの部分からそれを取り出すのでしょうか。われわれの感覚によっては知覚できないような、超感覚的世界に目を向けるとき、はじめてこのことは明らかになります。ですからここで、高次の諸領域について、あらためて考察する必要があります。」^{注8)}

シュタイナーのいう高次の諸領域とは、前述のように単なる感覚を超えた精神的知覚によってその存在が明らかとなる領域—すなわち精神界とよばれる領域—である。シュタイナーによればこの領域に「すべての事物の原像が存在」し、かつまた事物や生物の物質的存在形態は「この原像の模倣にすぎない」のである^{注9)}。この領域において、精神的に知覚された原像はやがて「響きはじめるようになる」。そしてこの「音響の和声リズムと旋律の交響する中で、彼らの(精神界における精霊たち・訳注)存在の原則や相互関係、親和関係が明瞭に示される。物質界の中で、悟性が法則や理念として認めるものが、『精神の耳』には精神の音楽として表現される」のである^{注10)}。そしてこの高次の領域で知覚される響きの余韻が地上的な意味での音楽なのである。

シュタイナーによればこのような高次の世界を知覚しうる能力はすべての人の中にまどろんでいる。そうした能力が、瞑想(Meditation)、そして集中(Konzentration)を通じて目覚めはじめると、人間の魂は一段一段と高みへ登っていく^{注11)}。そして、「目覚め」、「夢」、「夢のない眠り」、という人間の意識の三つの状態をすべて意識的に持つことができるようになったとき、このような高次の世界の音の響きを聞くことができるようになるという。しかし人は毎夜眠りの際に無意識的にはあれ、このような高次の世界に参入する。魂はその流動する音の響きの中にひたり、その印象を刻み付ける。「そしてその響きは本来その魂自身を織りなしている要素でもあり、その魂の故郷でもある」^{注12)}。それ故、人は音楽を聞くとき、自らの魂的、精神的な故郷を思い起こす。音楽の治癒的、活性的作用はそこからくるという。

また、シュタイナーによれば、この高次の領域において「音楽」として交響するものは、古代ギリシャにおいてピタゴラスが「天体音楽」(Sphärenmusik)と名づけたものと同様である^{注13)}。すなわちピタゴラス、及びピタゴラス派がその思想の中に含んでいた、世界は音楽のもつ数学的比率によってまとめあげられた調和的宇宙であるとする考え方の流れを、シュタイナーは彼の人智学的世界観の中に組み込んでいる。それ故、彼のとらえる「音楽」は秩序だてられた調和的なそれであり、小宇宙としての人間の内的な営みに親和するものなのである^{注14)}。

以上、シュタイナーの人智学的人間観における基本的な要素である人間と世界の三層性について見てきた。要約すれば、人智学的人間観においては、世界と人間はこのように精神、魂、身体(物質)の三つからなる存在としてとらえられる。音楽はこの中の高次の世界である精神界に原像を持つものである。その音楽的響きは魂に無意識的にはあれ刻印されており、魂は感覚によってとらえられる音楽の中にその響きを感じ取するという。すなわちシュタイナーにあっては「音楽」とは時空間に鳴り響く音響の組み合わせではない。「地上の音楽」は高次の根源的世界における響きの「余韻」なのである。彼においては音楽は「世界と人間の創造の原理」ともいうべき位置を与えられている。いわば世界も人間もその存在の根底において音楽的なのである。

3. 人間存在の四つの要素と音楽

シュタイナーの芸術論及び教育学が彼の人智学的人間学に根拠を持っていることは既に述べた。そしてこの人間学によって更に詳細に考察するならば、精神、魂、身体、の三つからなるものという視点に加えて、四つの根源的要素という視点からの人間把握がなされなければならないのである。その四つの要素とは、「物質体(physischer Leib)」「エーテル体(Atherleib)」「アストラル体(Astral-leib)」「自我(Ich)」である。

ここで極めて概略的にこれら四つの要素を素描することにしよう。

まず物質体についてシュタイナーは次のように述べる。「人間の物質体は、人間が鉱物世界と等しく分けられている要素である。」^{注15)}しかし人間におけるそれは鉱物世界におけるのと全く同質的作用の下におかれているのではない。重要な点は「鉱物世界と性質を等しくする人間構成要素は、死が始まった時点であらわにされるという事実」であり、更に「死とともにこの物質体は崩壊し始める」という点なのである^{注16)}。すなわち人間の物質体

には鉱物世界と同様の物質や力が作用しているが、「生命のある間は、その作用は、より高次の務めを果たしており、その物質や力は、死が始まって、はじめて鉱物世界に等しい作用をもつ」^{注17)}ものになる。

では、このように生命のある間、物質体の崩壊に抗して作用している要因は何か。シュタイナーによればこの要因についての考察は、感官によるのではなく、より高次のいわゆる超感覚的な観察によってのみ可能である。この要因をシュタイナーは人間存在の自立的な構成要素とみなし、「エーテル体」もしくは「生命体(Lebensleib)」^{注18)}と呼ぶのである。このエーテル体の作用は、「生命のある間、物質体の鉱物的素材や力を一つにまとめた形式、つまり姿形に表現」^{注19)}される。このエーテル体の存在と活動によって人間の物質体は総体としての崩壊から守られ、それを構成する諸物質や力は鉱物世界の諸物質より高次の務めを果たすことができるのである。このことから、先に述べた「精神」、「魂」、「身体」というときの「身体」の概念の中には、明らかな構成要素である「物質体」とともに、その姿形をまとめあげている「エーテル体」も含まれているといえる。「物質体」を鉱物的存在と共有しているのと同様、人間はこの「エーテル体」を植物的存在と共有している^{注20)}。

高次の考察は更に第三の人間存在の構成要素である「アストラル体」へと進む。この考察の際の手掛かりとなるのは「眠り」の現象である。「アストラル体」を欠いたならば、人間存在は眠りの状態、すなわち植物的生を継続するしかない。人間が眠りから目覚め、無意識から意識をもった存在へと目覚ます契機がこの「アストラル体」なのである。この場合の「意識」とは、「たとえば内的な苦痛を体験するときに、はじめて存在するといえる」^{注21)}ものであり、鉱物や植物にはないものである。人間は「アストラル体を介して動物と等しい性質を有している」^{注22)}のである。

更に第四の構成要素である「自我」とはいかなるものであろうか。彼によれば人間はこの自我をもはや顕在する周囲の世界と共有してはいない。自我は人間を他の存在から区別するものであり、人間を「被造物の長とする契機」^{注23)}なのである。その存在と働きは「言語というものの全領域のなかに、その本性にしたがって、一切の他の名称と区別される」^{注24)}ただ一つの名称、すなわち「私(Ich)」という語に示される。幼い子どもは自分の独立した本性をまだ自覚しておらず、自分のことを「○○ちゃん」等と他人のこのように言う。自らを「私」と呼ぶことと自我の成長は大きな関連を持つものなのである。

自我の働きいま一つ重要なものは「記憶」である。ア

ストラル体の内部には苦楽や飢渴の感情が生じる。しかし自我を欠いたならばそれは身体の内外で生起する誘因の作用のままに「現れては消えていかねばならない体験のただ中に存在しつづけ」^{注25)}るのみである。自我はこのような動物的な体験とは区別される「永続的なものを体験する要因」^{注26)}なのである。すなわちアストラル体によって「意識」されたものを、現前から消えた後も持続させるもの、それが自我の働きとしての「記憶」なのである。

以上、シュタイナーの人間認識の要素である物質体、エーテル体、アストラル体、自我について素描してきた。シュタイナーによれば人間存在の基本要素はこれだけにとどまらない。彼によれば覚醒時に営まれる人間の生活が多様で多彩なのは魂の中に様々な領域が存在するからである。人智学の立場では魂の中には、知覚の働く領域である「感覚魂 (Empfindungsseele)」, 思考力の働く領域である「悟性魂 (Verstandesseele)」, 更に個人的な好悪の感情を超えた真理の働く領域である「意識魂 (Bewusstseinsseele)」の三つの領域が存在する^{注27)}。これらの領域は個々分離したものではなく、相互に浸透しあい、関連しあっている。様々な魂の領域での体験は、「私」の体験として存在する。すなわち先に述べた自我がこうした魂全体を担って「私」において統括するのである。

自我はまた魂の領域を統括する働きを持つと同時に、他の三つの要素に働きかけて「高貴化し (veredeln) 浄化する (lautern)」^{注28)}働きを有する。自我の働きかけによって高貴化され浄化されたアストラル体は、自らの内に生ずる快、不快を統御し、欲求や願望をより高次のそれにつくりかえる。シュタイナーはその変化したアストラル体を「霊我 (Geistselbst)」と呼んだ。同様に自我によって変容をとげたエーテル体、物質体をシュタイナーはそれぞれ「生命霊 (Lebensgeist)」「霊人 (Geistesmensch)」と呼んだ^{注29)}。

このように人智学の人間認識においては人間の中に多様な構成要素を見る。シュタイナーは諸芸術を人間の諸構成要素との関連で論じ、固有の芸術論を生み出した。

シュタイナーは、建築、彫刻および彫塑、絵画、音楽、詩、オイリュトミーなどの芸術と、人間の諸構成要素との間に次のような関連を見いだす。すなわち「建築」は「物質体の法則を空間内に投影したものであり、彫刻と彫塑は「エーテル体の法則が物質化したものである。更に「アストラル的なものをエーテル体の中へ移す」と絵画が生じる。そして音楽は「自我の法則をアストラル体の中へ下げ、その中で運動、活動させる」ことによ

て生じるという^{注30)}。

アストラル体は前述のように、人間を目覚ませ、知覚や感情を共なった意識的な生活の契機を担っている。それ故に音楽的な知覚もまたアストラル体内部で起こるのである。アストラル体は更に音楽的な活動の根源力を有し、エーテル体や物質体に働きかける。呼吸、血液循環のリズムを整えたり、エーテル体に調和的な流れをもたらしたりするのである。このことをシュタイナーは「私たちは音楽的法則によって、宇宙からアストラル的存在として創造されたのです。……略……私たちは一個の楽器なのです」^{注31)}と言った言い方で述べる。すなわち感情生活の担い手たるアストラル体は、その活動する姿において音楽活動の担い手として人間全体に音楽を響かせるとも言える。

しかし、音楽活動の担い手は「アストラル体」である、というだけでは不十分である。更に重要なことはそこに自我の法則が投入されることによって「音楽的創造行為は人間の未来とかかわる」^{注32)}ということ忘れてはならない。なぜなら自我の法則を担った音楽は、未来の人間、より精神化された人間が意識的に歩むはずの、「精神世界への参入」の「体験を象徴的に表現する」^{注33)}ものでもあるからである。これはいかなることであろうか。人間の魂のある領域は通常の覚醒時にも眠っている。この領域とはすなわち意志-感情の領域である。音楽的体験とは「通常の世俗的な思考生活を内面で消し去り」ふだんは眠っているこの「意志-感情」の領域に意識的に沈潜して「精神的、魂の体験をする」ことである^{注34)}。それはいわば暗い無意識の領域を意識化することであり、これが「自我の法則をアストラル体の中へ下ろし、その中で運動、活動させる」ということである。これはシュタイナーが人間の認識の変容と発展の過程における「想像力 (Imagination)」および「靈感力 (Inspiration)」と呼んだ将来の人間の体験に相応するものである^{注35)}。音楽とはすなわち見える世界にはまだ存在していないものを「新たに創造する可能性」を予感させる芸術なのである。音楽のこの使命は彫塑的、絵画的な世界と、音楽的、詩的な世界との対比において一層明らかとなる。「彫塑や絵画においては人間はすでに存在した宇宙秩序を模倣する」が、音楽においては、「既に存在しているものから派生したものではなく、将来起こるべきものの基礎を人間が創造する」^{注36)}。物質化の一途をたどってきた人間は将来変容を遂げて再び精神を復活させるであろう。音楽は人間が精神復活への歴史を歩み通す以前に、この物質化した現代においてすでに将来におけるこの体験を象徴的に表現することのできる芸術なのである。

のようにシュタイナーが人間の諸構成要素との関連でとらえた音楽は、自我の法則、すなわち人間を「高貴化し浄化する」働きを担い、創造と変容をその本質とする自立的な営みによって浸透されたものである。

3. 身体の上層構造と音楽

現代の自然科学はその脅威的な発展を背景に、人間の身体に関しては克明な研究を行ってきた。今日一般的な見方は有機体としての人間の物質的基盤である身体が、精神活動を生み出すというものである。そしてとりわけこうした活動に関与するのは脳に統括される神経組織であるとの見方に立つ。しかしシュタイナーによればこれは極めて不十分かつ誤った見方である。

シュタイナーは身体の上層構造についても彼独自の見方、すなわち三層構造という考え方を提起する。彼のいう三層構造をなすものは第一に脳、知覚器官および皮膚に代表される「感覚・神経組織 (Sinnes- und Nervenorganisation)」, 第二に心臓, 肺, 血液循環器官に代表される「呼吸・血液循環組織 (Atmungs- und Blutkreislaufsystem)」(シュタイナーはこれらを往々にして「リズム組織 (rhythmisches System)」と呼ぶことがある), 第三に肝臓, 腸, 腎臓, 筋肉, 血液などの属する「新陳代謝組織 (Stoffwechselorganismus)」(ここに四肢組織 (Gliedmassensystem) が加えられることもある) の各組織である。しかしこれら三者は相対的には独立しながらも、現実の活動においては互いに浸透しあい、共同しあう相互関係を形成している。

シュタイナーは人間の心的活動は神経・感覚組織のみに依拠するという立場には立っていない。彼によれば心的な、つまり魂の諸活動は、これら三つの身体組織すべてと相互に深い関連を持つものなのである。彼は「思考(表象)」「感情」「意志」という魂の三つの基本的活動は「物質性の面での依存という意味において」^{注37)} 身体の上層構造に対応し結び付いていると考えた。彼は次のように述べる。「人間の思考作用は身体機構中の神経・感覚組織と結合しております。略 感情作用はリズム組織、とりわけ呼吸組織と血液循環組織とに結合しており、意志作用は、運動組織と新陳代謝組織を基盤としております」^{注38)}

シュタイナーによれば表象活動(知的思考活動一般)には「生体物質内での崩壊、死滅がともなう」^{注39)}。それ故神経・感覚器官は「死の極」ということができる。一方意志の活動は「運動をひきおこす四肢に流れ込んで」^{注40)} いる。この意志の働く領域である新陳代謝組織にお

いては有機的な生産活動が行われており、「絶えざる発生と生成の中」^{注41)}にあるいわば「生の極」といえるものである。そしてこの中間に、両極の平行をもたらず感情の働く領域、すなわち呼吸・血液循環組織が存在する。これらの器官の活動は規則的に繰り返すリズムをその特質としており、それ故「すべての音楽的なものはリズム組織と結び付いている」^{注42)}のである。彼はまた身体組織における両極を、身体の上層たる頭部と下部にあたる四肢、神経と血液、燃焼と塩分形成の対立という形でとらえ、いずれの場合にも中間領域である胸部、呼吸・血液循環組織が両極を仲介し、調和をもたらすものとして位置付けている^{注43)}。それ故にこの三つの組織はある種の層構造をなすものと考えられる。この両極と中間領域は魂の作用ともかかわっている。魂の生を表象と意志に絶えず変化させる反感と好感という対極的作用は感情の領域で一つのリズムを作り出す^{注44)}。シュタイナーは言う。「私達は自分の内部に感情の世界を作り上げて行きますが、これは好感と反感との絶え間のない交替—吸気と呼気—なのです」^{注45)}。

さて、前述のように「音楽的なもの」は「リズム組織」と深く結び付いている。この組織を持つ故に人間の生の形式は「音楽的」であり得る。しかしまた音楽的なものはリズム組織以外の身体組織とも大きなかわりを持っているのである。シュタイナーは「音楽的な体験」というものは「全人間による体験」であることを繰り返し強調した^{注46)}。この全人間とはまず第一に、身体の上層構造の全体を含む人間である。音楽体験の場合にはとりわけ神経組織、リズム組織、四肢組織が関与している。

彼によると、音楽的体験にとつての「耳」は通常の意味における感覚器官ではない。この体験は「耳によって全く固有の方法で意識に至る」のである。それはいかなる方法であろうか。彼によれば「耳」は「楽音から空気の要素を分離」する。そして「人間の内部に生きている音と反響」させるのである。この意味で、音楽体験にとつての「耳」は「感覚器官」ではなく、単に「反響器官」にすぎないといえる。感覚体験は「音楽体験の下では他の体験よりも本質的に内面化した体験」なのであり、「耳」は「内面に取り次ぐ媒介」として考慮される。耳を通して媒介された楽音は、リズム組織、すなわち感情の領域で人間内部の音楽と「反響、共鳴」する。更に「音楽的なもの」は四肢組織において「舞踏的なものに移行することができる。もちろん音楽的体験の際に、新陳代謝も存在する。しかしそれは「付随現象」であり、音楽的体験にとつては無意味なのである。こうした考察によって「音楽的体験」は神経組織、リズム組織、四肢組織を貫

く「全人間の体験」であるといえるのである^{注47)}。

さて、「音楽的体験」は「全人間による体験」であるということの第二の意味は魂の活動にかかわっている。シュタイナーは、「ハーモニー」、「メロディー」、「リズム」という音楽の三要素が、魂の三つの作用と結びついているという考えを提起した。音楽が徹頭徹尾感情体験であることはいうまでもない。しかしシュタイナーによれば感情は表象と意志の中間領域にあって「一方では表象の領域へと流れる感情」「もう一方では意志の領域へと流れる感情」がある^{注48)}。今日音楽にとって中心的なものであるハーモニーは、「直接に人間の感情へと向かう」^{注49)}。しかしメロディーの体験は感情体験でありながらも、「音楽的なものを感情の領域から表象の領域へと導く」^{注50)}。メロディーは「表象と何かしら似たもの」を持っている。シュタイナーは「皆さんは、ふだん表象の中で自由であるように、メロディーの中で自由になります。感情は澄まされ、純化されるのです」^{注51)}と述べる。これがメロディー体験なのである。一方リズムは音楽的体験を意志の領域へとつれゆく。「それは時間の経緯の中で生起する意志、外に向かうのではなく人間に結びついたままの意志なのです。それは意志の領域にまで広がった正真正銘の感情です」^{注52)}。

ここで留意しなければならないのは、こうした魂の作用は身体組織に基礎づけられている点でもある。彼によれば人間の内に音楽的体験を生起させるものは「リズム的要素」^{注53)}である。それは身体における心拍、すなわち血液循環と、呼吸との間の割合に基づいている。これは個人差などを考慮したうえででもなおかつおよそ1対4と考えることができる。それ故人間は「リズムに関して互いに理解しあうことができる」^{注54)}のである。シュタイナーは更に、「メロディーが呼吸の流れを貫いて心臓から頭へと運ばれるのにたいして、リズムは血液循環の波によって四肢へと送り込まれ、そこで意志として燃え上がる」^{注55)}と述べる。このようにして「音楽的なものは、全人間をみたましている」^{注56)}のである。

ところで音楽体験の本質を考える上でそれを「全人間的な体験」ととらえることは極めて大きな意味を持つ。すなわち音楽は表象活動—概念—によってとらえ得るものではないし、また四肢の領域での「意志」の「あまりにも生き生きした生命のいとなみ」^{注57)}に偏ったものでもない。音楽的体験はそれぞれの一面を含みながらも総体としての人間の中で調和と統一を持つものである。シュタイナーは言う。「音楽的体験の価値ある部分は、人が自己を保ち、動きを抑制するという内的な必然性に依拠しています」^{注58)}。こうした音楽観は当時の芸術の二つ

の方向、すなわち「音楽美」を学問的、認識的に解明しようとする方向と、「純然たる享楽」として音楽をとらえようとする方向の両者に対するシュタイナーの具体的な批判と言えるのである^{注59)}。

4. 結 び

以上私はシュタイナーの音楽教育理論の根底にある音楽観を、彼の人智学的人間観の諸要素、とりわけその構造体としての側面との関連において明らかにしてきた。現代の音楽はひたすら物理的な音響、すなわちシュタイナーのいうところの「音楽を追い払った」^{注60)}音をも重要な素材として成り立っている。またひたすら陶酔的に感情をとりけさせる音楽もあふれている。こうした音楽の氾濫は音楽教育の内容をとらえどころのないものにもしてきた。シュタイナーは当時にも存在したこのような問題に対して、人間の全体性—構造的にも人生全体という動的時間的な意味においても—を見通した視点から解き明かそうとした。物質化する一途の現代の文化の中では、精神や魂といったことがらに言及し、「芸術の尊厳」^{注61)}を問題にするシュタイナーの論は甚だ古臭いものと受け取られるかも知れない。しかし彼の緻密で誠実な語り口とともに、両極を切り捨てるのではなく循環させることによって偏りを正し、すべてを健全化しようとする強烈な意志は、この理論を極めて力強いものにしてている。本論稿を閉じるにあたってとりわけ強調しておきたいのはこの点である。

思うに人智学的人間観は、型にはまった図式ではあり得ない。むしろこのような本質を持った存在として人間を認識しようとするとき生まれる全く新しい心の働き、すなわちこれまでの常識や習慣などによって制約された表象、感情、意志を賦活する作用がそこにあることに注目したい。

最後に、本論稿で述べた人智学的人間観における人間の諸構成要素は、生れつき均等に備わっているものではなくその発達の在り方や時期もそれぞれに異なっている。今後、シュタイナー学校の音楽教育の内容と方法とに直接かかわる問題、すなわち人間の発達におけるこれらの構成要素の動態と、音楽教育の関連について更に研究を進めたいと考える。

引用文献および注

- 1) Steiner, R. (1861~1925)。オーストリア生まれの哲学者。ゲーテの自然科学の研究者として出発後に精神の領域を探求する精神科学 (Geistswissenschaft) としての人智

- 学 (Anthroposophie) を構築した。
- 2) 1919年, シュタイナーの精神科学の教育分野での実践としてドイツのシュツットガルトに設立された12年制の私立学校。ナチスの時代には閉鎖されたが現在ではその数は世界で400校を超える。
 - 3) 厳密に言えば, 精神の領域を探求する科学の総称が「精神科学」であり人智学はとりわけ人間の本質をこの精神科学の立場から究めようとするものである。
 - 4) Steiner, R. *Theosophie*, Dornach, 1978, S. 21. 高橋巖訳, 「神智学」, 1984イザラ書房, 33~34頁。
 - 5) Steiner, R. *Erziehungskunst, Methodik-Didaktisches*, Dornach, 1974, S. 25. (以下 *Methodik-Didaktisches* と略す) 坂野雄二・落合幸子訳, 「教育術」, 1986, みすず書房, 24頁。
 - 6) Steiner, R. *Theosophie*, S. 122. 高橋訳, 「神智学」, 126頁。
 - 7) Steiner, R. *Das Wesen des Musikalischen*, 1981, Dornach, S. 11.
 - 8) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 13.
 - 9) Steiner, R. *Theosophie*, S. 121. 高橋訳, 「神智学」, 127頁。
 - 10) Steiner, R. *Das Wesen des Musikalischen*, S. 13.
 - 11) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 13.
 - 12) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 15.
 - 13) Steiner, R. *Theosophie*, S. 123. 高橋訳, 「神智学」, 127頁。
 - 14) Steiner, R. *Das Wesen des Musikalischen* S. 18.
 - 15) Steiner, R. *Die Geheimwissenschaft im Umriss*, 1962, Dornach, S. 52. 石井・樋口訳, 「神秘学概論」, 52頁。
 - 16) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 53. 石井・樋口訳, 前掲書, 52頁。
 - 17) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 53. 石井・樋口訳, 前掲書, 52頁。
 - 18) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 54. 石井・樋口訳, 前掲書, 53頁。
 - 19) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 54. 石井・樋口訳, 前掲書, 54頁。
 - 20) ここで用いられる「エーテル」という言葉の意味は現代物理学で用いられるように「光の担体」という意味ではない。Vgl. Steiner, R. *a, a, O.*, S. 54. 石井・樋口訳, 前掲書, 54頁参照。
 - 21) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 59. 石井・樋口訳, 前掲書, 59頁。
 - 22) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 59. 石井・樋口訳, 前掲書, 58頁。
 - 23) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 60. 石井・樋口訳, 前掲書, 59頁。
 - 24) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 65. 石井・樋口訳, 前掲書, 65頁。
 - 25) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 60. 石井・樋口訳, 前掲書, 59頁。
 - 26) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 61. 石井・樋口訳, 前掲書, 60頁。
 - 27) Steiner, R. *Theosophie*, S. 47. 高橋訳, 「神智学」, 52頁。
 - 28) Steiner, R. *Die Erziehung des Kindes vom Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft*, Stuttgart, 1961, S. 16. 大西そよ子訳, 「精神科学の立場から見た子どもの教育」, 人智学出版社, 1982, 19頁。
 - 29) Steiner, R. *Theosophie*, S51ff. 高橋訳, 「神智学」, 56~60頁。
 - 30) Steiner, R. *Kunst im Lichte der Mysterienweisheit*, Dornach, 1980, S. 45. 西川隆範訳, 「シュタイナー・芸術と美学」, 1987, 平河出版社, 183頁。
 - 31) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 50. 西川訳, 前掲書, 188頁。
 - 32) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 63. 西川訳, 前掲書, 205頁。
 - 33) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 63. 西川訳, 前掲書, 204頁。
 - 34) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 52. 西川訳, 前掲書, 192頁。
 - 35) シュタイナーは未来においては, 人間存在は太古に持ち得たような超感覚的な世界を認識する力を新たな形で復活し得ると考えた。また彼によれば, 現在においても, 訓練によってこうした超感覚的な器官を開発することにより, 高次の世界の認識への道は誰にでも開かれている。彼はその認識の段階を, 「想像力 (Imagination)」, 「靈感力 (Inspiration)」, 「直感力 (Imagination)」と呼んだ。Vgl. Steiner, R. *Wie erlangt man der höheren Welten?* Dornach, 1982. usw. 高橋巖訳, 「いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか」, 1984, イザラ書房他, 参照。
 - 36) Steiner, R. *Methodisch-Didaktisches*, S. 49. 坂野落合訳, 「教育術」, 55頁。
 - 37) Steiner, R. *Die geistig-seelischen Grundkräfte der Erziehungskunst*, Dornach, 1979, S. 58. 新田貴之訳, 「教育の根底を支える精神的心意的な諸力」, 1983, 人智学出版社, 85頁。
 - 38) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 58. 新田訳, 前掲書, 85頁。
 - 39) Steiner, R. *Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik*, (以下, *Allgemeine Menschenkunde* と略す) Dornach, 1980, S. 191. 新田貴之訳, 「教育の基礎としての一般人間学」, (以下「一般人間学」略す) 1982, 人智学出版社, 254頁。
 - 40) Steiner, R. *Gegenwärtiges Geistesleben und Erzie-*

- hung, Dornach, 1973, S. 127. 佐々木正昭訳, 「現代の教育はどうあるべきか」, 1985, 人智学出版社, 171頁。
- 41) Steiner, R. *Allgemeine Menschenkunde*, S. 58. 新田訳, 前掲書, 64頁。
- 42) Steiner, R. *Die geistig-seelischen Grundkräfte der Erziehungskunst*, S. 66. 新田訳, 「教育の根底を支える精神的-心意的な諸力」, 96頁。
- 43) 例えば, Steiner, R. *Allgemeine Menschenkunde, Zweiter Vortrag*. 新田訳, 「一般人間学」2講など。
- 44) Vgl. Steiner, R. *a, a, O.*, S. 34, f. 新田訳, 前掲書, 31頁参照。
- 45) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 35. 新田訳, 前掲書, 31~32頁。
- 46) Vgl. Steiner, R. *Das Wesen des Musikalischen*, Dornach, 1981, S. 123.
- 47) Vgl. Steiner, R. *a, a, O.*, S. 121.
- 48) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 137.
- 49) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 137.
- 50) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 138.
- 51) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 138.
- 52) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 139.
- 53) Vgl. Steiner, R. *a, a, O.*, S. 140.
- 54) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 140.
- 55) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 140.
- 56) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 140.
- 57) Steiner, R. *Methodisch-Didaktisches*, S. 44. 坂野・落合訳, 「教育術」, 48頁。
- 58) Steiner, R. *Das Wesen des Musikalischen* S. 122.
- 59) Vgl. Steiner, R. *a, a, O.*, S. 122. シュタイナーは1923年, ヴァルドルフ学校の音楽教育理論に関するこの講演の冒頭で, この問題について触れ, この両極の克服を強調している。
- 60) Steiner, R. *a, a, O.*, S. 132.
- 61) Steiner, R. *Goethe als Vater einer neuen Ästhetik*, Dornach 1985, S. 33. シュタイナーはゲーテの言葉 (「芸術の尊厳は音楽において際立っている。音楽においては物質的な素材が使用されないからである。」) を引用して芸術があらゆるものを高め, 高貴にすることを述べている。